

きれいな自然を守る

沼周辺の清掃活動を実施

「伊豆沼・内沼クリーンキャンペーン」が3月20日、本市と栗原市の3会場で実施され、登米市伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター周辺の清掃活動には、市内の企業、団体や市民など214人が参加しました。

清掃活動は、ラムサール条約登録湿地である伊豆沼・内沼の自然環境を保全し、次世代に引き継ぐために開催。ペットボトルや空き缶、古タイヤなどが集められました。参加した、ボーイスカウト迫第1団所属の佐々木健悟さん(7)＝豊里町下町＝は「いっぱい歩いて空き缶とビニール袋を拾いました。みんなできれいにしたので、ごみを捨てないでほしいです」と話していました。



参加者は、多くの渡り鳥が飛来する豊かな自然を守ろうと、沼周辺を歩きながら、沿道に捨てられたごみを拾い集めました。

思い出胸に感謝の幕

米山幼稚園が3月で閉園

米山幼稚園で3月13日、閉園式が行われ、園児や保護者、地域住民などが参加し、地域に愛された園舎との別れを惜しみました。

同園は、より良い幼児教育の環境を整備するため、よねやま保育園と統合し、米山こども園を開園することに伴い閉園。PTA会長の佐藤美紗登さん＝米山町鈴根＝は「思い出がたくさん詰まっているので、寂しい気持ちはありますが、子どもたちを育ててくれたので、たくさんのありがとうを伝えたいです。子どもたちには、先生に教えてもらったことを胸に、夢の実現に向かって一歩一歩成長してほしいです」と願いを込めました。



園舎への感謝の気持ちを込めて「にじ」を合唱する園児。「楽しかった米山幼稚園、さようなら」と大きな声で別れを告げました。

修復ピアノお披露目

音楽と美術親しむ3日間

「もくもくランド寄贈ピアノ再生プロジェクト」が3月20から22日まで、道の駅津山もくもくランド物産館で開かれ、3日間で約280人が訪れました。

イベントは、2024年に仙台市内のカフェから同館に寄贈され、住民有志によって修復されたグランドピアノの活用を目的に開催。音楽ライブや作品展示、ワークショップなどが催され、参加者は思い思いに楽しみました。ストリートピアノに参加した戸森瞭さん(9)＝仙台市＝は「SNSで修復の様子を見て、今日演奏できるのが楽しみでした。本番は緊張したけど、たくさんの人に聴いてもらえてうれしかった」と笑顔を見せました。



ピアノは4月から一般公開され、時間制で貸し出しを実施。演奏は有料で、収益はピアノの維持や修繕に活用されます。

子どもの想像力育む

絵本の読み聞かせ研修会

「読み聞かせ研修会」が3月14日、中田生涯学習センターで開かれ、市内の読み聞かせボランティアや幼稚園教諭など30人が参加しました。

研修会は、読み聞かせの効果を理解し、おはなし会に必要な知識と技術を習得するために開催。「子ども読書コミュニティプロジェクトみやぎ」会長の高梨富佐さんを講師に迎え、年齢に合った絵本の選び方などを学びました。参加した、千葉信子さん＝中田町弥勒寺南＝は「昨年、5人で『きざしはしの会』という読み聞かせボランティアを始めました。良い絵本の特徴を知ったので今後の活動に生かしたいです」と話しました。



「読み手も楽しむこと」「リズムを付けて読むこと」など、講師による実演を交えた講話に、参加者は真剣に耳を傾けていました。

洪水などから命を守る

三陸道の避難階段が完成

登米町地内で施工を進めていた三陸沿岸道路の避難階段が完成し、3月24日に地域住民を対象に利用説明会が開催されました。

避難階段は、洪水などの水害時に道路の高架部分を緊急用避難場所として活用できるように2箇所設置。三陸沿岸道路沿線で作業している人や市指定の避難所に間に合わない人が緊急的に避難することができます。参加した秋山光穂さん＝登米町蛭沢＝は「すぐ避難できるように、避難場所だと分かるような表示があると助かりますね。避難場所が増えるので地域住民の安全・安心につながると思います」と期待を寄せました。



緊急時は、扉の透明なアクリル板を強くたたいて壊し、内側のドアノブを回すと鍵がなくても開けることができます。

繊細に描く自然の趣

本市ゆかりの画家作品展

歴史博物館企画展「大内松華～多年、筆硯を耕す～」が3月14日から5月31日まで、同館企画展示室で開かれています。

企画展では、明治時代に活躍した日本画家、大内松華の作品を展示。令和7年3月に閉校した旧錦織小学校に飾られていた山水画をはじめ、現代に伝わる作品の数々を一目見ようと、多くの人が足を運んでいます。展示解説に訪れた早川宏昭さん＝岩手県奥州市＝は「チラシを見て来ました。私の家にも大内松華の作品があり、今回の展示で作風や足跡を知ることができたので感無量です」と感想を話していました。



期間中は学芸員による展示解説も実施。東和町を中心に活躍した同氏の足跡を、現存する作品や文献を通じて振り返りました。